

第3節

無職の若者の世界 まとめ

以上、就業形態別でみたアンケート結果を中心にインタビューの声を交えながら無職の若者の実態を追ってきた。

単にデータから無職の状況を概観する以上に、インタビューの声からは彼らの不安や悩みが浮き彫りになったのではないだろうか。

分析からは次のような特徴がみえてきた。

1) 生活時間

アンケート結果からは、仕事がないためか、平日と休日の差がなく、朝は遅く起き、夜は遅く寝る不規則な生活を送っている様子がうかがわれた。インターネットの時間も長く、インタビュー事例のように、ネットショッピングや懸賞をしている若者もいると思われる。

2) 現在の親子関係

インタビューからは、親と顔を合わせないように気を遣っているケースがある一方で親と気さくに何でも話し合える関係などもあり、それぞれのケースによって異なった。無職の状態を快く受け入れる親もいれば、世間体や家庭内の経済的な要因から親もストレスを抱えているような状況が浮かび上がってきた。

3) 生活の様子

アンケートからは、自由な時間はたくさんあるが、無職のために金銭的には厳しい状況であることがうかがえた。

インタビューからは、将来への大きな不安を抱えている様子がうかがわれた。

4) 就職についての意識

アンケート結果では無職のうち8割近くが何らかの形で働きたいと思っていることがわ

かった。

インタビュー事例では2名が希望の仕事があれば働きたいと切望していた。しかし、「やりがいのある仕事」や前職と同じような待遇や職種を希望するなど、希望の仕事にはこだわりがある様子がうかがえた。また、就職の相談機関に対する不満の声も上がっていた。現状では本人の適性や希望を踏まえて的確なアドバイスがなされていないのかもしれない。

5) 子ども時代の体験や親のしつけ

子ども時代の体験や家庭の様子に関してみると、アンケート結果からは、他者との交流体験は少なめで、リーダーシップをとったり、友だちと仲良くなることは得意ではない様子、また、親は楽しそうに生活していない、家族仲がよくないような家庭の様子がうかがわれた。ただし、現在無職という状況なので、過去の評価も低くなる可能性も考えられる。

インタビューからは、両親がささいなこと言い合いをしていたことなどを思い出したケースや、子どもの頃の友だち関係があまりうまくいっていなかったケースもあった。子ども時代の他者との交流体験は少なく、印象に残るような大人の存在がなかった様子もうかがえた。

次に、親のしつけに関してみると、アンケート結果からは、自分でできることは自分でやる、嫌なことでも我慢してやる、友だちを大切にする、自分のやりたいことを大切にするなどを重視する割合が低めとなっていた。インタビューからは、友だちをつくることよりも塾や習い事を優先させられたり、甘やかされたりとそれぞれのケースで異なった様子がみられた。

第2部 分析編

第3章

専業主婦の世界

神田和恵 (1～3節)

この章では、専業主婦の分析を行う。今回のアンケート調査では、「無職」の回答者の割合が全体の23.2%を占め、そのうち無職の既婚の女性、すなわち専業主婦が約8割を占めていた。

第1部において総合的な生活満足度を就業形態別にみたところ、専業主婦の生活満足度が7割以上と高い傾向がみられた。また、友だちや親との人間関係や現在の生活においても肯定的な回答の割合が高かった。

ここでは、専業主婦の生活満足度や人間関係の肯定感が高い要因をインタビュー調査とアンケート結果から明らかにしていきたい。

第1節

事例の紹介<5名>

※いずれの事例も、回答者ご本人の承諾を得て掲載しています。

はじめに

第1部で若者の総合的な生活満足度を就業形態別にみたところ、専業主婦で「満足」と回答した割合が7割以上と高く、また、友だちや親との人間関係や現在の生活においても肯定的な回答の割合が高かった。

この節では、「総合的な生活満足度」の設問において「とても満足している」と回答した2名、「まあ満足している」と回答した1

名、「あまり満足していない」と回答した2名、合計5名の専業主婦にインタビュー調査を行った。

なお、いずれの対象者も調査実施の都合上、首都圏在住の専業主婦である。

次ページの表3-1-1～表3-1-5に専業主婦全体の基本属性を示した。こちらを参考に専業主婦の姿を5つの事例からご覧いただきたい。

ケース1 Kさん 女性34歳 専業主婦 夫と子ども1人(3歳男児)と同居……………152

※総合的な生活満足度「とても満足している」

ケース2 Lさん 女性28歳 専業主婦 夫と同居(現在妊娠中)……………154

※総合的な生活満足度「とても満足している」

ケース3 Mさん 女性33歳 専業主婦 夫と子ども2人(7歳男児・3歳女児)と同居……………156

※総合的な生活満足度「まあ満足している」

ケース4 Nさん 女性33歳 専業主婦 夫と子ども2人(8歳女児・7歳女児)と同居……………158

※総合的な生活満足度「あまり満足していない」

ケース5 Oさん 女性26歳 専業主婦 夫と子ども1人(1歳女児)と同居……………160

※総合的な生活満足度「あまり満足していない」

【アンケートデータからみる専業主婦(n=461)の基本属性】

表3-1-1 年齢

											(%)
25歳	26歳	27歳	28歳	29歳	30歳	31歳	32歳	33歳	34歳	35歳	
3.9	4.6	4.8	5.6	8.0	11.1	15.6	11.7	10.6	13.0	11.1	

注) 平均年齢 31.1歳。

表3-1-2 同居している人

						(%)
配偶者	子ども	あなたの父親	あなたの母親	その他	あなた自身のみ(一人暮らし)	
99.6	76.6	3.5	4.3	6.7	0.0	

注) 複数回答。

表3-1-3 配偶者の年収

							(%)
300万円未満	300万円以上～ 400万円未満	400万円以上～ 500万円未満	500万円以上～ 600万円未満	600万円以上～ 700万円未満	700万円以上～ 800万円未満	800万円以上	
14.8	20.5	26.0	16.8	9.4	6.8	5.6	

注) 平均年収 473.8万円。

表3-1-4 配偶者の職業

										(%)
民間企業の 正社員	公務員 (公益団体など の正職員を含む)	契約社員	派遣会社の 登録社員	パート・ アルバイト・ 非常勤職員	自営業主・ 家族従業者	自由業・ フリーランス	その他	無職	学生	
77.4	7.4	0.9	0.4	1.1	6.9	2.0	3.3	0.7	0.0	

表3-1-5 最終学歴

					(%)
中学校卒	高校卒	短大・高専・ 専門学校卒	大学卒	大学院卒	
2.2	28.2	45.1	23.9	0.7	

注) 最終学歴…各サンプルについて、「高校」「短大・高専」「専門学校」「大学」「大学院」のそれぞれを卒業したか否かを判別し、いずれの学校段階も卒業していない場合を「中学校卒」、「高校」は卒業しているがそれ以外は卒業していない場合を「高校卒」、「短大・高専」または「専門学校」を卒業しているが「大学」「大学院」は卒業していない場合を「短大・高専・専門学校卒」、「大学」は卒業しているが「大学院」は卒業していない場合を「大学卒」、「大学院」を卒業している場合を「大学院卒」として最終学歴を定義し、算出した。



ケース1 Kさん 女性34歳 専業主婦 夫と子ども1人(3歳男児)と同居

総合的な生活満足度：「とても満足している」

専業主婦になったのは子育てに専念したいから。壁にぶつかりながらも夫と困難を乗り越えていく力がついた。今が一番幸せ！

●経歴

4年制大学卒業後、塾に2年間勤務。帰宅が深夜に及ぶことも多く、周囲の勧めで転職。得意の英語を生かせる仕事に就き7年間勤務。

●家族構成

結婚6年目。夫と子どもの3人で暮らしている。夫の年収600万円。

●趣味

PC、スキー、お出かけスポットを調べて外出すること、おいしいものを食べ歩くこと。

●メディア接触時間・家族との会話時間

インターネット2時間、テレビ1時間30分、家族との会話2時間。

●専業主婦になったわけ

育児に専念したいから仕事を辞めた。母親も専業主婦だったので、母親がモデルだと思う。

●悩みや不安

健康に自信がないこと。子どもの幼稚園選びの際、ストレスで胃潰瘍をわずらったことがある。

●夫との関係

夫は家事も育児も積極的に手伝ってくれる上、精神的にも支えてくれる。とても良好。

●育児サポート環境

夫の母親、自分の両親は、経済的・物質的に援助してくれる。

●強み

見通しを立てて計画的に物事を進めること。

●将来展望・今後の夢

あと1人子どもが欲しい。子どもから手が離れたら夫婦で旅行をしたい。親が保有する賃貸マンションに住んでいるため、出る必要はないのだが、夫は露天風呂付きの一戸建てが欲しいと言っている。

●働くことについて

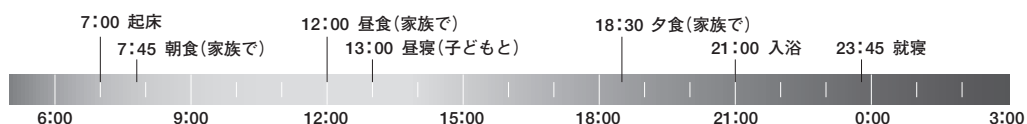
今はとくに働く必要性を感じていない。経済的に満たされているので、子どもから手が離れるまでは外で働くことは考えていない。ただ在宅でできる仕事はやってみたい。

1日の過ごし方

月～金曜日 子ども中心に定期的に生活している。子どもが幼稚園に通っている間にスポーツクラブや買い物に出かけたり、友人と食事したりしている。



土日・祝日 土日は家族で外出が多い。広報誌やインターネットで得た情報をもとに出かける。



Kさんのこれまでの歩み

小学生時代

小学生時代は、父親の仕事の都合でしばらく海外生活をしていた。海外で英語に触れて英語が好きになった（大学でも専攻した理由である）。

中学生時代

中学生時代は、近所に住むデザイナーの女性に美術のポスターのデザインについてアドバイスしてもらったり手伝ってもらったことがあり、子どものようにかわいがってもらった。

高校生時代

高校生時代は、英語部に入ったが1年後に廃部。その後、日本の文化を海外の人に紹介できるようになりたかったので茶道部で活動していた。

大学生時代

大学生時代は、音楽バンドのサークルに所属し、ドラムを担当。電子オルガンの演奏や塾の講師など10種類ほどのアルバイトをしていた。また、友人と年に数回、国内外への旅行を楽しんでいた。親からは小遣いをもらわずに、身の回りのものは自分でまかっていた。

Q 親離れしたきっかけは？

A 結婚前に1人暮らしを体験し、好きなときに好きなことができる自由を獲得した。

就職

塾に就職したが、深夜に帰宅する毎日だったため、転職。新しい会社では、得意な英語を生かせることに魅力を感じた。企画にも携わることができ、やりがいもあった。転職先の同期と年に数回、国内外へ旅行していた。また、習い事をするのが趣味で、英会話・陶芸・スポーツクラブ・PC教室に行っていた。

結婚

転職後、PCが趣味となり、夫とはインターネットで知り合った。それまではつきあうときに相手の学歴も気にしていたが、夫と知り合い、頼れる人柄、人間性に惹かれ結婚を決めた。

結婚後、仕事が忙しく帰宅が21～22時に及ぶことも多かった。「これで奥さんといえるのか」と悩んで泣いたこともあった。

専業主婦生活

子どもは未熟児で生まれ、体が弱かった。そのためかナーバスになり、夫の育児に仕事のような完璧さを求め、関係がギクシャクしてきた。その度に夫婦で何度も話し合いを重ね、理解し合い、妥協案を探り、乗り越えてきた。

子どもが2歳になったとき、一生治療が必要な病気を抱えていることが判明。家族でこれからはがんばっていかねばならないと強く感じた。夫婦の絆が深まっていったと思う。

現在

お金を使わなくても工夫次第で家族との楽しい時間を作り出せる。家族と一緒に過ごしている時間が何よりも幸せであり、これからの子どもの成長が楽しみ。

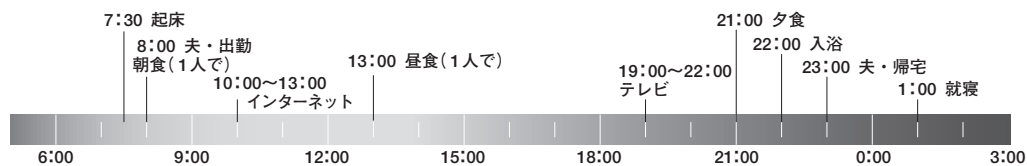
ケース 2 Lさん 女性28歳 専業主婦 夫と同居（現在妊娠中）
総合的な生活満足度：「とても満足している」

仕事を辞めてストレスがなくなった。結婚し、妊娠して大切なものが増えていく感じ。今が一番幸せ！

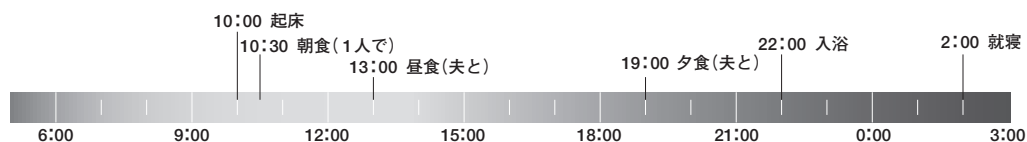
- 経歴
大学卒業後IT関連企業に就職し、SEとして4年間勤務。退職。その後1年間、他のIT関連企業に就職し退職。
- 家族構成
結婚2年目。2歳年上の夫と2人で暮らしている。夫の年収700万円。
- 趣味
読書。
- メディア接触時間・家族との会話時間
インターネット3時間、テレビ3～4時間、夫との会話2時間。
- 専業主婦になったわけ
仕事をしているときは、深夜までの残業も多く、家事などがままならない状態だった。夫だけの収入でも困らないので未練なく辞めた。
- 悩みや不安
もう少し夫に早く帰ってきてもらいたい。
- 夫との関係
とても良好。家事サポートはなし。
- 理想のタイプ
人生のモデルは母親。ふつうの主婦ではあるが、やさしい人。自分が今まで育ててもらって幸せな気持ちでいるのは両親のおかげだと思っている。
- 強み
与えられたミッションに対しては確実にこなさないと気がすまない性格。
- 子どもの頃の家族の様子
両親ともまじめな性格。父親は道場を開いていた。地域で道場関係の人づきあいは良好であった。
- 将来展望・今後の夢
子育て後に夫と一緒に旅行に行きたい。金銭的に余裕があるならなるべく働きたくない。
- 子どもへの期待
あいさつはしっかりとしつづけたい。また周囲に気を遣える人になってほしい。

1日の過ごし方

月～金曜日 家事はこなし、その他の時間は好きな読書に費やすことが多い。



土日・祝日 妊娠前は渋谷などに食事に出かけたが、最近は近くのスーパーまで買い物に出かけることが多い。



Lさんのこれまでの歩み

小学生時代 小学生時代は、歴史が好きだったので母親に博物館に連れていってもらった。また、読書好きで歴史の本や推理小説を好んで読んでいた。

中学生時代 中学生時代は、学業成績は上位であった。自分自身よい成績をとらないと気がすまないところがあった。

高校生時代 大学受験に向けて予備校に通っていた。また、夏休みに発掘のアルバイトをして、考古学への関心が高まり、大学での学部専攻につながっていった。

大学生時代 大学進学当初は、大学院進学を考えていた。しかし、何か国語にも精通している教授から、「学者の世界は違いすぎる」と感じ、卒業後は普通に就職しようと思った。

考古学から他の文化に興味湧き、専攻を変更。大学4年生の時に、エジプトに1人で1か月ほど旅行に出かけた。とくに行き先を決めず、その日ごとに行動していた。もし危険な目にあったら「それはそれではない」と思っていた。

Q 親離れたきっかけは？
A 就職して1人暮らしをしてから数か月、ようやく自分のペースで生活できるようになってきた。両親に対して強く尊敬の念を感じるようになったのもちょうどその頃からである。

就職 大学4年生の時、IT業界で就職活動をし、1社目の内定で決めた。仕事はSEであった。仕事はとてもハードで残業が多かった。

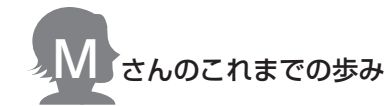
結婚 夫は職場での先輩であった。つきあうようになってから同じプロジェクトに従事し、その後結婚。

上司と相性が合わず退職。転職先は夫の紹介のIT関連会社。帰宅が深夜に及び日が続き、生活時間が乱れ、ストレスもたまり、プロジェクトの完成後に退職。

専業主婦生活 仕事を辞めたことに後悔はない。しばらくは専業主婦に専念したいと思っている。結婚して妊娠したことで、自分の中の人生観が変わった。

現在 愛する人と一緒にいられて今が一番幸せ！子どもを妊娠して「自分1人の体ではないのだから、大切にしなければ」と強く思う。

ケース **3** Mさん 女性33歳 専業主婦 夫と子ども2人(7歳男児・3歳女児)と同居
総合的な生活満足度：「まあ満足している」

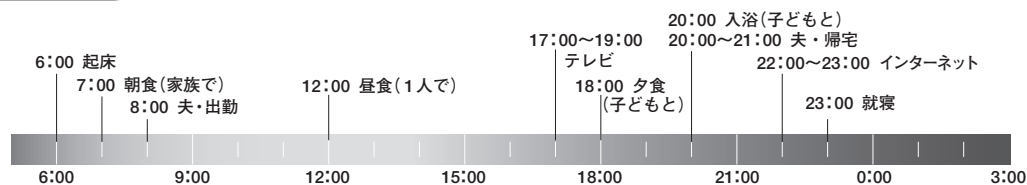


仕事を辞めたのは夫との生活を大事にしたかったから。人と接するのが好き。下の子が幼稚園に慣れたら近所で働きたい！

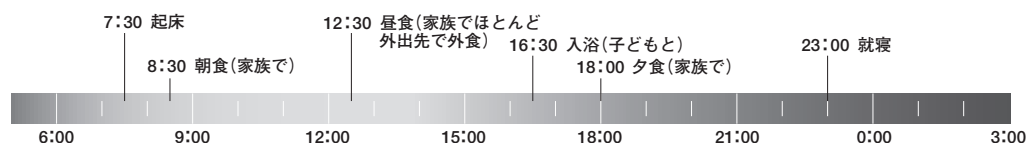
- 経歴
高校卒業後、上京し百貨店に5年間勤務。事務と販売を経験。夫との休暇が合わないため結婚を機に退職。その後近所で派遣社員の事務などを経験。下の子どもの妊娠を機に退職。
- 家族構成
2歳年下の夫と2人の子どもと暮らしている。持ち家(夫の親が建ててくれた)。夫の年収300万円。
- メディア接触時間・家族との会話時間
インターネット1時間、テレビ2時間、家族との会話2時間。
- 専業主婦になったわけ
下の子どもを妊娠したから。
- 悩みや不安
働く時間が自分の時間だという認識があるので、今すぐにでも働きたい。
- 夫との関係
とても良好。夫の家事育児参加は100点満点だと思う。
- 強み
人づきあいが上手なこと。人間関係ではストレスを感じることがなく円満。
- 子どもの頃の家族の様子
家族仲はよく、近所や親戚づきあいも良好だった。いつも人が集まる楽しい家庭だった。小さい頃は父親によく遊んでもらっていたので、その影響か子どもと遊ぶことが苦にならない。
- 将来展望・今後の夢
とくに理想となるモデルはない。下の子が幼稚園に慣れたら働きたい。また、子育てが一段落したら、夫と旅行でも行きたい。
- 子どもへの期待
人に迷惑をかけない子どもに育ててほしい。

1日の過ごし方

月～金曜日 子ども中心の生活。小学校のPTA役員を務めているので日中の外出が多い。



土日・祝日 休日は家族で外出することが多い。行き先は池袋や近くの公園。



小学生時代 小学生時代は、友だちと仲良くするのは得意だった。誰とでも幅広く接するタイプであり、人づきあいで苦労することがなかった。目上の人や大人からかわいがられて育ったと思う。

中学生時代 中学生時代は、勉強は計画的にやるほうではなかったが、高校は推薦で決まった。体育や音楽などの実技が得意だった。

高校生時代 高校でも水泳を続けたかったが、残念なことにプールがなく、野球部のマネージャーとして活動していた。

就職 東京の百貨店に就職を決めたのは、「せっかくだから東京に出てみたら」という母親の一押しだった。

結婚 夫は同級生の後輩にあたる人で、東京で知り合った。夫の休日と百貨店勤務である自分の休日が合わないため、結婚を機に退職。その後、近所で派遣社員として働いていたが、子どもの妊娠・出産で仕事から離れている状態である。

専業主婦生活 家事や育児の分担については、結婚前から話し合っていたわけではないが、夫が自然と手を差し伸べてくれた面もあり、自分自身もあまり我慢せずに、夫に何でも言うので、ストレスをためずにいられるのだと思う。

現在 昔からあまり深く考えこまないタイプ。それが、物事を悲観的に捉えず、肯定的に感じる事ができる理由なのかもしれない。自分の人生に後悔はなく、いつも楽しく暮らしていると思う。

親離れしたきっかけは？
A 高校卒業後、会社の寮に入ってから。とくに入社3年目で個室に変わってから1人暮らしらしい生活ができるようになった。

職場にはいろいろな人がいたが、ストレスを感じることなく人間関係は円満であった。子どもの頃から両親の同級生や父親の会社の人などさまざまな大人と接してきた。根底に「人が好き」という気持ちがあるので、人づきあいに苦痛を感じないのかもしれない。

子育てをとくに大変だとは感じていない。子どもの頃から幼い兄弟や従兄弟たちとよく遊んでいたため、子どもとはこういうものだという認識があったからかもしれない。

ケース **4** Nさん 女性33歳 専業主婦 夫と子ども2人(8歳女兒・7歳女兒)と同居
総合的な生活満足度：「あまり満足していない」

Nさんのこれまでの歩み

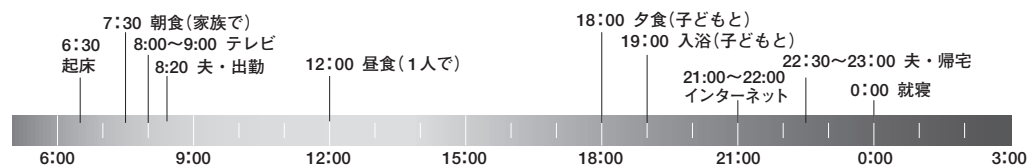
常に「1人でなんとかしなければ！」と思い育児をしていた。
2人の子育てでせかせかしてしまいがち。もう少し精神的・時間的にゆとりをもちたい！

- 経歴
短大卒業後、金融関係の企業に事務職で3年間勤務。結婚退職。
- 家族構成
夫と2人の子どもと暮らしている。マンションを購入。夫の年収800万円。
- 趣味
手芸。
- メディア接触時間・家族との会話時間
インターネット1～2時間、テレビ1～2時間、家族との会話1時間。
- 専業主婦になったわけ
夫とは職場で知り合ったため、結婚後その職場で働くことに抵抗があったことと結婚してすぐに妊娠したため。
- 悩みや不安
精神的にも時間的にもゆとりをもちたい。日常生活でせかせかしてしまうので、子どもたちにもゆとりをもって接したい。
経済的にゆとりはあるので、働きたいとは思わないが、子どもの将来の教育費を考えるともう少しお金があるといいなと思う。

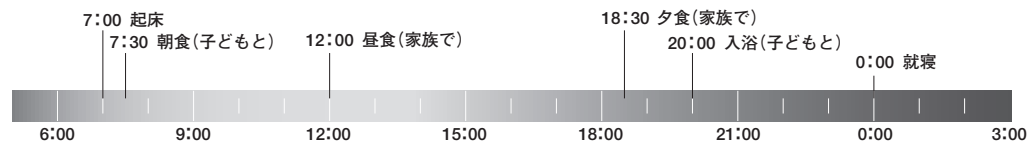
- 夫との関係
残業で帰宅が遅くなるので、話をしたり悩みを相談したりする時間がとれない。
- 強み
人と協力して物事を進めること、筋道を立てて論理的に物事を考えること。
- 子どもの頃の家族の様子
父親は仕事人間、母親は教育熱心でしつけなどに厳しいタイプ。学業成績が振るわないと怒られた。ときどき家族で山登りをしていた。
- 将来展望・今後の夢
家事や料理、掃除、部屋を飾ること、ガーデニングなどに精通することで生活の質を向上させたい。人生のモデルは栗原はるみさん。
- 子どもへの期待
自分で考えて行動できるような人に育ててほしい。

1日の過ごし方

月～金曜日 子ども中心に定期的に生活している。買い物には週3回くらい出かける。



土日・祝日 土日は午後から外出し、遠出して買い物や公園に出かける。



小学生時代

小学生時代は、母親の意向でいろいろな習い事をやらされた(水泳、そろばん、絵画、書道、合唱団)。高学年から学習塾にも通っていた。その中で心から好きだったのは絵画だった。工作したり、絵を描いたりすることが好き。現在の趣味(手芸)につながっている。

中学生時代

中学生時代は、母親が塾に通わせるなど強いるため、自分から自主的に計画を立ててやろうという気は起きなかった。

高校生時代

大学受験を視野に入れ予備校に通っていた。明確な目標はなかったが、母親はある程度の学歴は必要だという考えだったので、自分も大学には行かないといけなかなと思っていた。

短大生時代

短大2年生の時、4年制大学への編入学を漠然と考えていたため、就職活動を行わなかった。希望はかなわず、大学の紹介で金融関係の企業に就職先が決まった。

就職

仕事は任される面もあり、それなりにやりがいもあった。夫とは仕事の関係で知り合い、結婚を決めた。職場は、結婚後も仕事を続けられる雰囲気ではなかったため、退職。

Q 親離れしたきっかけは？

A 親子関係が変わったのは、結婚してから。それまでは親のほうの子離れできずにいろいろ口を挟んできた。結婚してから母親からの口出しがなくなった。子どもができてから子育てに口を出してくるかと思ったが、意外にあっさりしていた。

結婚

結婚後は転職して働き続けるつもりだったが、すぐに妊娠。自分の中で子育てと仕事を両立させることは難しいと漠然と感じていたため、仕事から離れたことを後悔していない。

専業主婦生活

子育ては誰にも頼らず、ほとんど1人で行った。実家も遠かったため、「とにかく1人でなんとかしないと」と思っていた。やることをこなしていたら、子どもたちも小学校に入学し、ようやく子育てが一段落したという感じである。好きな手芸に取り組みめる時間も作れるようになってきた。

現在

今欲しいのは精神的・時間的なゆとりである。子どもたちにもゆとりをもって接したい。

ケース **50** さん 女性26歳 専業主婦 夫と子ども1人(1歳女児)と同居
総合的な生活満足度：「あまり満足していない」

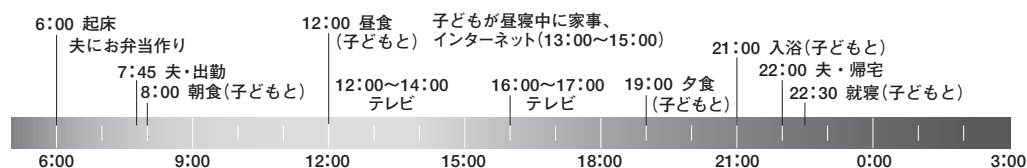
子育てに専念すると決めたが、社会とつながっていたいし自分の専門性も高めたい。やりたいことがいっぱいあるのに育児に追われ時間がない！

- 経歴
高専卒業後上京、コンピュータ関係のSEとして約5年近く勤務。妊娠し退職。
- 家族構成
結婚して3年半。9歳年上の夫と1歳の子どもと暮らしている。夫の年収600万円。
- 趣味
PC。
- メディア接触時間・家族との会話時間
インターネット2～3時間、テレビ3時間、夫との会話15分程度。
- 専業主婦になったわけ
結婚2年目の妊娠を機に退職。当時は仕事を続けるつもりだったが、夫から「家庭に入ってほしい」と言われた(約束は2人目の子どもが3歳になるまで)。また、実際に子どもをもって働いている先輩をみて、仕事と育児の両立の大変さを感じていたため。
- 悩みや不安
英会話の勉強がしたい、仕事のスキルアップも図りたいなどやりたいことがいっぱいあるのに、子どもにつきっきりの毎日で時間がないこと。

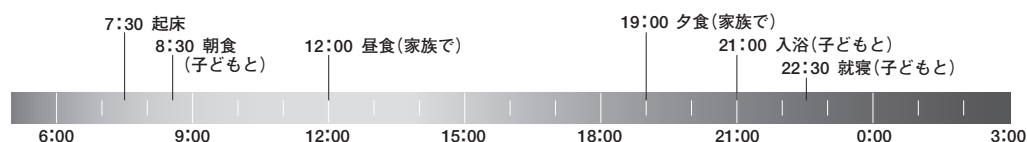
- 夫との関係
とても良好。家事と育児に対して感謝の言葉がある。ただ、帰宅が20～23時頃と遅いので、もう少し早く帰ってきてほしい。
- 理想のタイプ
人生のモデルは母親。2年前に資格を取得し、介護の仕事をしている。いくつになっても働く意欲を失わない姿を尊敬している。高専への進学も母親の一言が影響した。
- 子どもの頃の家族の様子
祖父母を含め姉妹の7人家族。父親は子どもに対して厳しく怒ることがあり、母親はそのなだめ役。父親の帰宅は早く、家族団らんを大事にしていた。近所づきあいや親戚づきあいもよかった。
- 将来展望・今後の夢
仕事に復帰したい。子育てが一段落したら、家族で海外旅行に出かけたい。そのためにも英語を勉強したい。
- 子どもへの期待
常識のある子、人の気持ちのわかる子、人間的に誰からも好かれる子、自分の意見はしっかりともち伝えられるような芯の強い子に育ててほしい。

1日の過ごし方

月～金曜日 つかまり立ちを始めた子どもの世話で忙しい毎日。散歩を兼ねて1時間ほどベビーカーで買い物に出かける。



土日・祝日 家族で公園に行ったり、ドライブに出かけたりすることもあるが、夫は英会話の勉強やスイミングなどに費やしていることが多い。自分の生活としては平日とあまり変わらない。



さんのこれまでの歩み

小学生時代

小学生の頃はあまり勉強した記憶がなく、自然の中で遊ぶことが好きだった。また、パソコンクラブに参加、中学校でもパソコンの授業があり、パソコンに興味をもっていた(高専への進学・専攻につながっている)。

中学生時代

中学生の頃から勉強がおもしろくなった。塾に通い、学習を強制され競い合うという勉強のスタイルが自分に合っていたようで成績が伸びた。

高専生時代

高専への進学を決めたのは、母親から就職率が100%だと言われたから。専攻は電子制御工学科であった。

Q 親離れしたきっかけは？
A 高専生時代から自分のペースで生活していた。実際に親離れしたのは、就職を機に上京し自炊するようになってから。

就職

高専の就職課で自分の希望と重なるハードウェアの会社に決めた。就職を機に上京。

仕事は、短納期で残業も多く休日出勤もあり、厳しかった。しかし、顧客のもとに自分が携わった製品を届け、実際に動いたときに「今までの苦労が報われた」と感慨に浸ることができ仕事へのやりがいを感じた。

結婚

職場でのスポーツイベントを通して夫と知り合った。結婚後も仕事を続けていた。結婚2年目で妊娠。仕事への未練はあったが、夫の要望と先輩の様子から、育児と仕事の両立は困難と判断し、子育てに専念することにした。

専業主婦生活

子どもにつきっきりの毎日で、英会話や手芸などやりたいことがいろいろあっても手がつけられない。経済的に働く必要性には迫られていないが、前職で最先端の技術に携わっていたので、仕事を通して最先端の技術に触れていたい、世の中へのつながりを得たいという気持ちは強い。

現在

好きな人と一緒にいられる今の生活は幸せだが、今はやりたいことがいっぱいあり、時間が足りない。時間にゆとりができ、好きなことができれば、今の生活にもっと満足すると思うが、子どもとも離れたくない。そのジレンマに悩む毎日である。

●インタビュー事例からわかること

以上、専業主婦の総合的な生活満足度に着目して5名の専業主婦の事例を紹介した。

いずれの方も、妊娠や出産を機に仕事から離れ、育児に専念しようと決め、自らが専業主婦を選択している。

インタビュー事例から、専業主婦の生活満足度の高さの要因として、以下のような点が考えられる。

① 子どもの存在

子どもを妊娠した時点で仕事を続けるかどうかを選択している。子どもができるということは、女性にとって人生が大きく変わることでもあるからだろう。

② 仕事への未練のなさ

仕事への未練をきっぱり断っているタイプに満足感が高いようである。

③ パートナーからの家事や育児・精神的サポート

パートナーが家事や育児に協力的であると満足度が高い。おそらく愛されているという実感が湧くのであろう。また、パートナーが励ましや感謝の気持ちを伝えることで、精神的にも大きな支えになるようである。

④ 子ども時代の温かい家庭環境

とくに家族に尽くし、家庭を温かく守ってくれた母親の存在を大きく感じ、自分も母親のようでありたいと思う傾向が全般的にみられた。

次節では、以上のような生活満足度の高さの要因を踏まえつつアンケート結果を交えながら専業主婦の生活の様子や価値観・意識、子どもの頃の様子などから生活満足度について探っていききたい。

第2節

インタビューを踏まえたアンケートの分析

●はじめに

第1部の就業形態別のデータからは、専業主婦の総合的な生活満足度や人間関係に対する評価が高いことが特徴としてみられた。

この節では、専業主婦のアンケートデータとインタビューで上がった声をもとに専業主婦の生活満足度が高い要因を探っていきたい。

1. プロフィール

専業主婦全体のプロフィールは第1節 p.151の表3-1-1～表3-1-5を参照。

2. 生活にかかわる意識

第1部1章4節でみた就業形態別の生活総合満足度について図3-2-1 (p.165)でもう一度振り返ってみよう。

総合的な生活満足度をたずねたところ、「満足している」(「とても満足している」+「まあ満足している」、以下同)と回答した割合は、有職者ではいずれも5割前後であった

が、専業主婦は7割を超えていた。専業主婦の高い生活満足度を支える要因は何なのかを探るため、生活満足度の要因をもう少し細かくみていこう。

今回のインタビュー調査からは、専業主婦を選択した大きな理由として、子どもの存在が大きいのことがわかった。結婚したから専業主婦になるのではなく、子どもができたから専業主婦になることを選んだという事例が多かった。今日の日本の就業状況では、一般的に男性は子どもができて人生に大きな変化は起きないが、女性は、仕事を辞めたり、休職したり、ペースダウンしたりと子どもとの生活のために人生が大きく変化する場合が多い。

そのようななか、今回のインタビュー事例のように、すんなりと専業主婦を選択した人もいるのだろう。一方で、築いてきたキャリアを中断することに大きな抵抗を感じ、葛藤し、「仕事では代わりの方がいるが、生まれてくる子の親に代わりはいない」という思いから専業主婦を選択した人もいるのではないだろうか。また、子どもを出産するまでは、すぐに仕事に復帰するつもりでいても自分の

インタビューから

～専業主婦としての今の生活、とても幸せ！～

- ・とても幸せ！ 愛する人と一緒にいられて夫から「働かなくてもいいよ」と言われている。
- ・結婚し、出産し、子育てし、後悔はない。いつも楽しく、いつも幸せに生きている。
- ・家族と過ごす時間がとても大事、とても幸せ。
- ・好きな人と一緒にいられることは幸せなこと。時間が得られて好きなことができれば、さらに満足度が向上すると思う。

赤ちゃんを手にして、「こんなにかわいいなんて思わなかった。できればずっとそばにいたい」と専業主婦を選択した人もいるのであろう。

母親となった女性の人生を大きく変える子どもの存在は、かけがえのないものであり、自分の人生をかけて守りたいと感じるものなのかもしれない。

では、図3-2-2で子どもの有無別に専業主婦の総合的な生活満足度をみていこう。

「満足している」割合は、子どものいる専業主婦が75.0%、子どものいない専業主婦が65.7%と子どものいる専業主婦の満足度のほうが約10ポイント高い。

ここで、既婚有職女性の子ども有無別に総合的な生活満足度と比較してみよう(図3-2-3)。子どものいる既婚有職女性の「満足している」割合は66.7%、子どものいない既婚有職女性の「満足している」割合は

73.8%で、子どものいない既婚有職女性の満足度のほうが7.1ポイント高い。

以上の結果から考えると、女性にとって子どもの存在が大きなものであることは確かだが、有職女性の場合は仕事と子育ての両立は難しく、逆にストレスになっているのかもしれない。

今回のアンケート調査では対象者に子どもの年齢を聞いていないが、調査年齢が25~35歳なので子どもの年齢も比較的若いことが推測される。乳幼児ほど親の手がかかる。抵抗力が弱いので病気にかかりやすく、睡眠のリズムが不安定なため親は夜中に何度も起こされることもあろう。また、危険から子どもを守らねばならないので親は目が離せない。有職の母親にとっては、育児と仕事の両立は肉体的にも精神的にも厳しい状況におかれることが多く、それが総合的な生活の満足度を下げているのではないだろうか。

インタビューから

～専業主婦になったのは子育てに専念したいから～

- ・子どもが小さいうちは、自分が子どもをみていきたい。何年前に「子どもがキレル」という言葉が流行った。母親が家にいない家庭にその傾向がみられることをニュースで知り、自分の母親は家にいて子育てに専念してくれたので、自分もそうしようと思った。
- ・結婚前から出産後に仕事を辞めようという明確なプランを立てていたわけではないが、自分自身、仕事と子育てを両立させるのは難しいと漠然と感じていた。
- ・当初は、妊娠・出産後も仕事を続けるつもりでいたが、夫からの子育てに専念してほしいとの要望があったこと、出産後も仕事を続けている先輩をみて、子育てと仕事の両立が大変そうだったこと、妊娠したことによって会社が自分を見る目が変わったという感じを受けた。夫までもが会社から変な目で見られたら嫌だと思い、仕事を辞めた。
- ・身なりをきれいにしても働いている以前の同僚をみて、少し考えてしまうこともある。しかし「その人とは目標とするものが違う」と思い、割り切るようにしている。「私が子育てに専念したいから仕事を辞めた」という気持ちをもつようにしている。

図3-2-1 総合的な生活満足度(就業形態別)

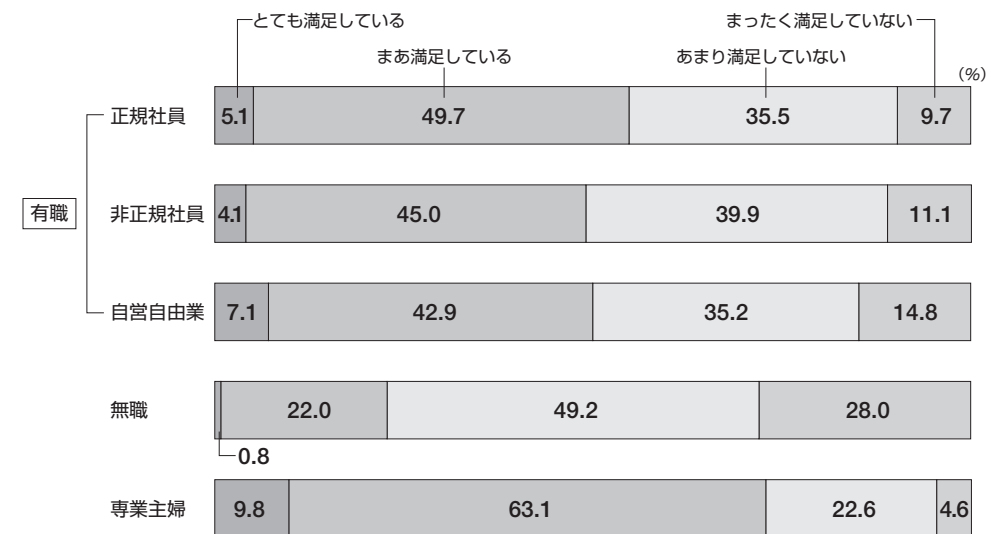
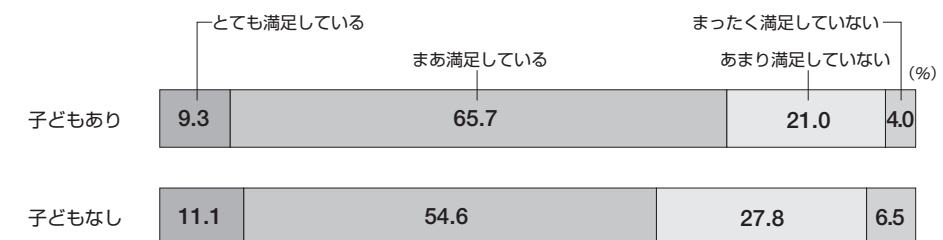
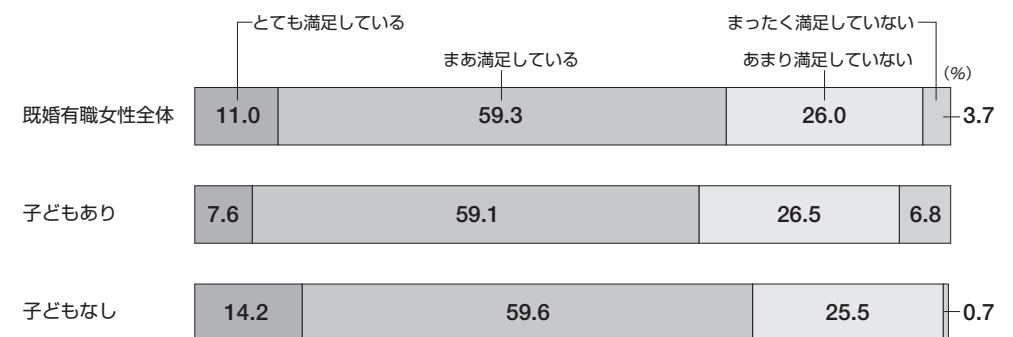


図3-2-2 専業主婦の総合的な生活満足度(子どもの有無別)



注1) 専業主婦のみ分析。
 注2) 子どもあり・子どもなし：現在同居している人を複数回答でたずねた設問において、「子ども」を選択した人を「子どもあり」、選択しなかった人を「子どもなし」とした。以降同様。
 注3) 子どもあり 353名、子どもなし 108名、以降同様。

図3-2-3 既婚有職女性の総合的な生活満足度(子どもの有無別)



注1) 既婚有職女性(273名)のみ分析。
 注2) 子どもあり 132名、子どもなし 141名。

専業主婦にとって子どもの存在が満足度に影響を与えている傾向にあることがアンケート結果およびインタビューからみえてきた。

では、現在の生活において、どのようなことに満足し、どのようなことに不満があるのだろうか。

現在の生活について経済・時間・理想・余暇・未来・健康の6つの側面から満足度をみていこう(図3-2-4)。まず、専業主婦全体で「とてもそう」+「まあそう」の割合が一番高かった項目は、「これから先の生活が楽しみだ」(62.7%)であり、以下、順に「時間的なゆとりがある」(57.7%)、「健康に自信がある」(54.4%)、「充実した余暇を送っている」(47.7%)、「理想に近い生活を送っている」(46.4%)となり、一番低い項目は「経済的なゆとりがある」(38.0%)であった。

なお、「経済的なゆとりがある」で「あまりそうでない」+「ぜんぜんそうでない」の割合は約6割であり(図表省略)、p.151の表3-1-3の配偶者の年収をみても、専業主婦の生活は、必ずしも経済的に余裕があるというわけではなさそうである。

では、子どものいる専業主婦と子どものない専業主婦では、どのような差がみられる

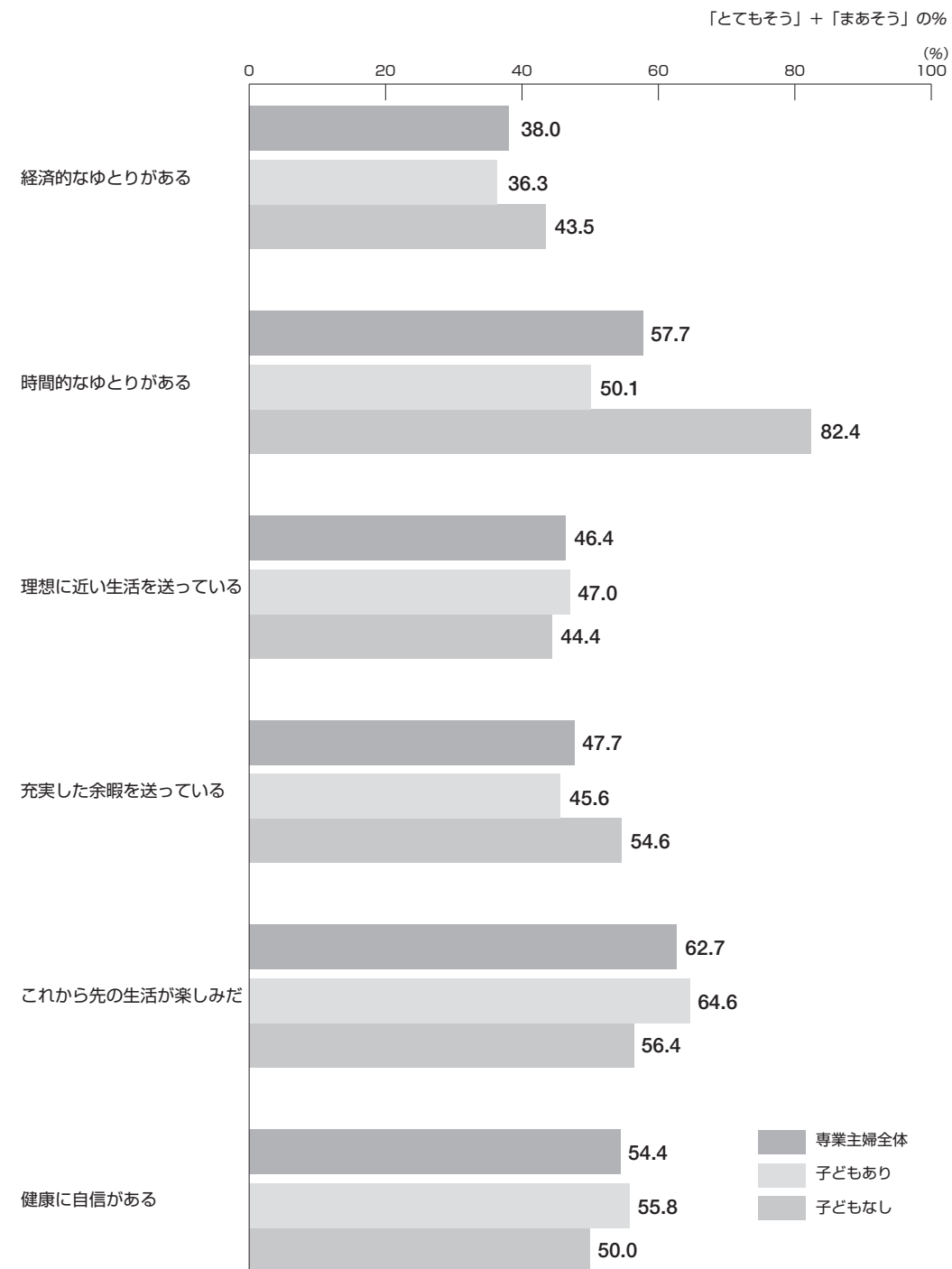
のだろうか。

子どものいない専業主婦に高い項目は「経済的なゆとりがある」(子どもあり36.3%<子どもなし43.5%、以下同)「時間的なゆとりがある」(50.1%<82.4%)、「充実した余暇を送っている」(45.6%<54.6%)であり、子どものいる専業主婦のほうが高い項目は「これから先の生活が楽しみだ」(64.6%>56.4%)、「健康に自信がある」(55.8%>50.0%)などであった。

子どものいない専業主婦は、経済的・時間的にゆとりがあり、充実した余暇を送っていることへの評価が高く、子どものいる専業主婦は、将来への楽しみと健康への自信について満足度が高かった。

また、子どもの存在にかかわらず、「理想に近い生活を送っている」と回答した割合は約半数であった。インタビューの声にもあったように、理想とは自分の母親である場合が多く、自分がこうして幸せなのは子どもの頃、温かく家庭を守ってくれた母親のおかげであるという。自分もそのようにして家族を支えていきたいという気持ちの表れなのであろう。

図3-2-4 現在の生活について思うこと(子どもの有無別)



注) 専業主婦のみ分析。

インタビューから

～私の理想は専業主婦の母親である～

- ・家にいて子育てに専念するというスタイルは、母親をモデルとしていると思う。
- ・人生のモデル的な存在は母親である。母親はやさしい人である。自分が今まで育ててもらって幸せな気持ちでいるのは、両親のおかげだと思っている。
- ・理想とする生活像は、料理や掃除などの家事に精通し、部屋を飾り、ガーデニングをして生活の質を向上させること。そうすることで自分も楽しいし、家族も過ごしやすくなると思う。
- ・家族と一緒に過ごしている時間が何よりも幸せであり、これからの子どもの成長が楽しみである。

3. ふだんの生活の様子

次に専業主婦のふだんの生活の様子をみていこう。

① 生活時間

日々、家事育児に取り組んでいる専業主婦にとって、子どもの有無によって生活時間に差が生じると考えられる。前節のインタビュー結果（1日の過ごし方）からもみられるように、子どものいる専業主婦は子育てに追われ忙しい日々を送っている。

アンケートデータを見ると、子どものいる専業主婦は、子どものいない専業主婦より睡眠時間が20分ほど長い。前節のインタビュー事例のように、子どもを寝かしつけるとき一緒に寝てしまうことや子どもと一緒に昼寝をすることもあるのだろう。

アンケートデータに戻ると、子どものいる専業主婦は、子どものいない専業主婦よりもテレビの視聴時間は30分ほど短く、インターネットをする時間は40分ほど短い。家族との会話時間（電話を含む）は30分ほど長い（表3-2-1）。

子どものいる専業主婦は、子どもの世話にかかる分だけテレビやインターネットに費やす時間は少なくなるようだが、家族とのコミュニケーションの時間に多くを費やしていることがわかる。

② ふだんの生活

ふだんしていることについて「よくある」＋「ときどきある」割合の高い順に示した（図3-2-5）。専業主婦全体の数値をみると、9割以上が回答していることは「料理をする」（97.4%）、「掃除や洗濯をする」（96.3%）、「食事の時間を楽しいと思う」（91.1%）、「決まった時間にきちんと食事をする」（90.0%）と日常の家事に関することである。5～6割前後が「デパートなどで買い物をする」（63.3%）、「友だちと会う」（59.2%）、「趣味やスポーツを楽しむ」（51.7%）、「読書をする（マンガや雑誌を除く）」（49.0%）である。「自分の能力を高めるための勉強をする（資格取得やお稽古事など）」は19.9%と低く、自分のために時間を費やせる人が少ないことがわかる。

「よくある」＋「ときどきある」の割合で子どものいる専業主婦と子どものいない専業主婦の間で20ポイント以上差のみられた項目をみてみると、「趣味やスポーツを楽しむ」（子どもあり45.6%＜子どもなし71.3%）、「読書をする」（子どもあり43.7%＜子どもなし66.6%）、「自分の能力を高めるための勉強をする」（子どもあり14.7%＜子どもなし37.0%）であった。

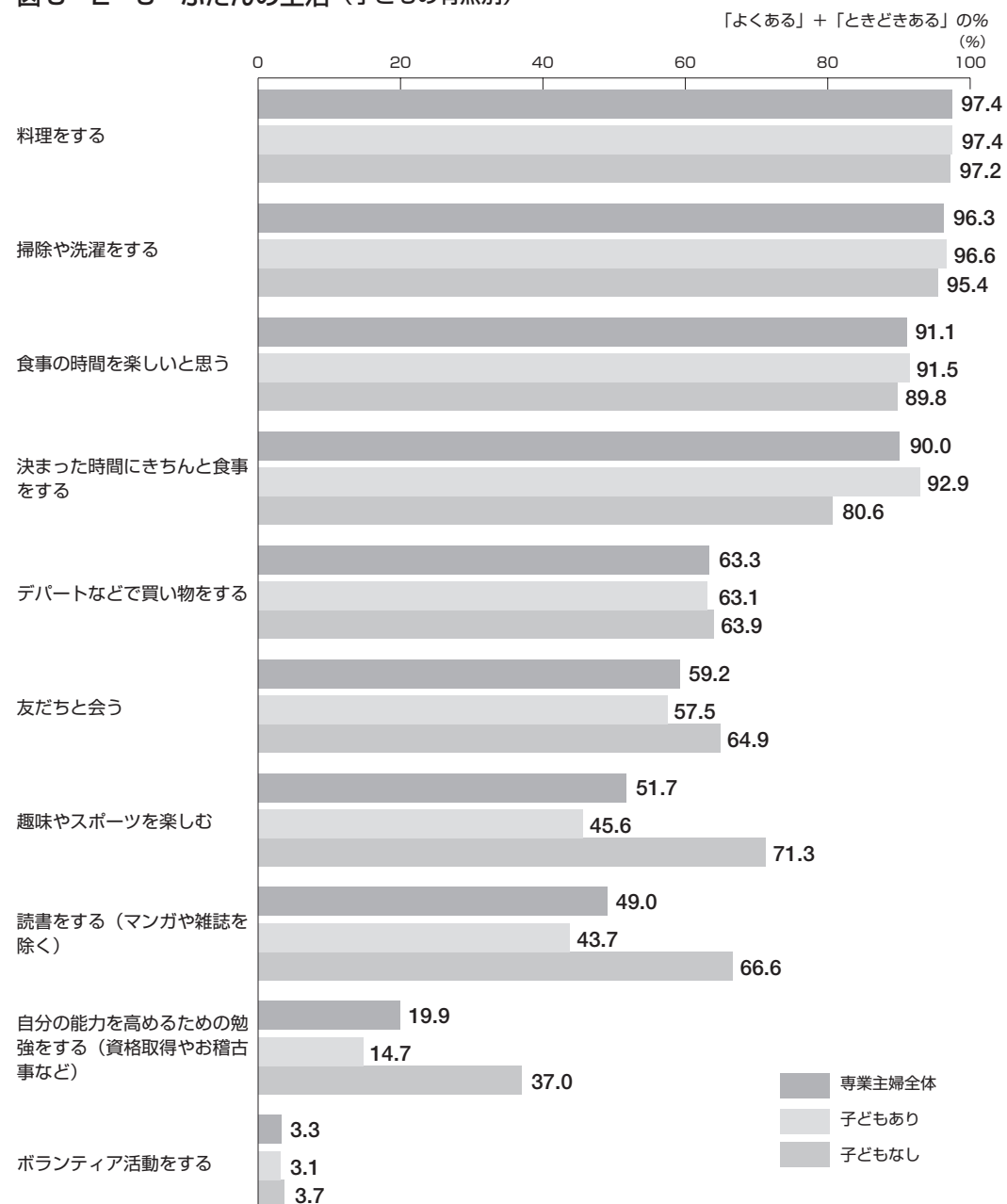
子どものいる専業主婦は、家族の食事や洗濯などに多くの時間が費やされていることがわかる。子どもの世話に時間がかかる分、趣味やスポーツ、読書などにあてる時間は少なくなり、ストレスやジレンマを抱える人もいるのかもしれない。

表3-2-1 平均生活時間（子どもの有無別）

	睡眠時間	テレビの視聴時間	インターネットをする時間	家族との会話時間（電話を含む）
専業主婦全体	6時間56分	3時間17分	2時間20分	2時間26分
子どもあり	7時間02分	3時間09分	2時間10分	2時間32分
子どもなし	6時間39分	3時間42分	2時間52分	2時間05分

注）専業主婦のみ分析。

図3-2-5 ふだんの生活（子どもの有無別）



注）専業主婦のみ分析。

インタビューから

～子どもにつきっきりの日。やりたいことがいっぱいあるのに時間がない！～

- ・日常生活では時間がなくてせかせかしてしまうことがある。子どもたちにもゆとりをもって接することができればと思う。
- ・やりたいことがいっぱいあるのに子どもにつきっきりの日で、とにかく時間がない。

4. 人間関係

専業主婦とその友だち、親、配偶者とのかわりについてみていこう。第1部では、他の就業形態と比較して、専業主婦の人間関係に対する評価が高いことが明らかになった(第1部1章3節)。人間関係の満足度が、現在の総合的な生活満足度につながっているのではないと思われる。

図3-2-6①～③に、①友だち②親③配偶者との人間関係を「とてもそう」+「まあ

そう」の割合で示した。

まず、友だちとの関係からみてみよう(図3-2-6①)。専業主婦では、子どもの存在の有無にかかわらず友だちとの関係に満足している割合は約8割であり、また、子どものいる専業主婦と子どものいない専業主婦で5ポイント以上差のみられた項目は、「悩み事を相談できる友だちがいる」(子どもあり73.9%<子どもなし80.6%、以下同)、「いろいろなタイプの友だちがいる」(74.5%>69.5%)であった。

インタビューから

～人と接するとき、苦手とか大変とか思わないようにしている～

- ・人づきあいに苦痛を感じない。人と接する上で苦手とか大変とか思わないようにして、その人に合った接し方が自然にできる。

親との関係について、子どものいる専業主婦と子どものいない専業主婦で比較してみると、子どものいる専業主婦のほうが、親とのかわりに対する評価が高い傾向がみられた。とくに「とてもそう」+「まあそう」の割合で5ポイント以上差のある項目は「よく話をする」(子どもあり77.1%>子どもなし71.3%、以下同)、「悩み事を相談する」(56.6%>

45.4%)であった(図3-2-6②)。

専業主婦になった理由として、自分の母親がモデルとなっているケースが多いことがインタビュー事例からも明らかになった。夫婦関係を築く上で、子どもを育てる上で、親戚づきあいをしていく上で、生活に関して生じるさまざまな悩み事を親に相談するのもかもしれない。

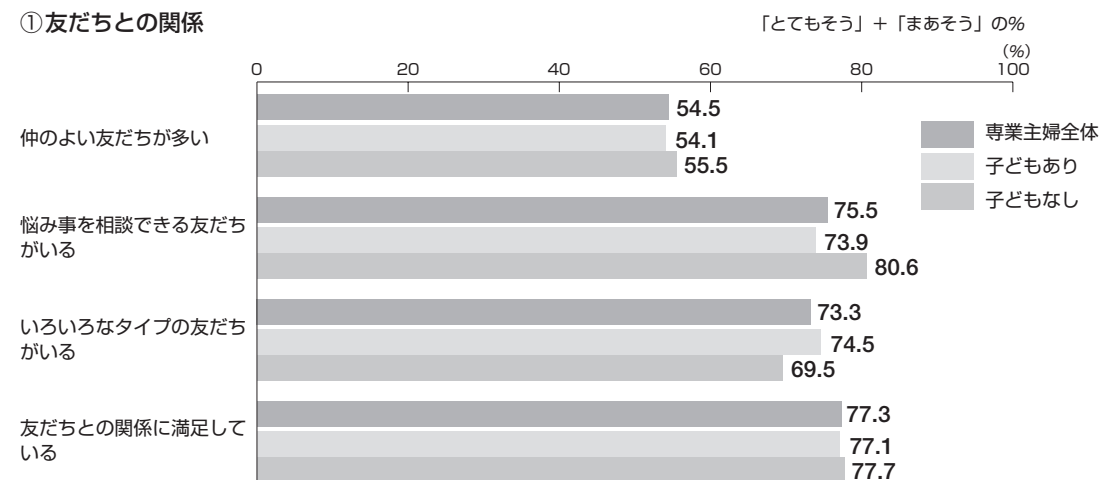
インタビューから

～親とは仲よし・意外にあっさりした関係～

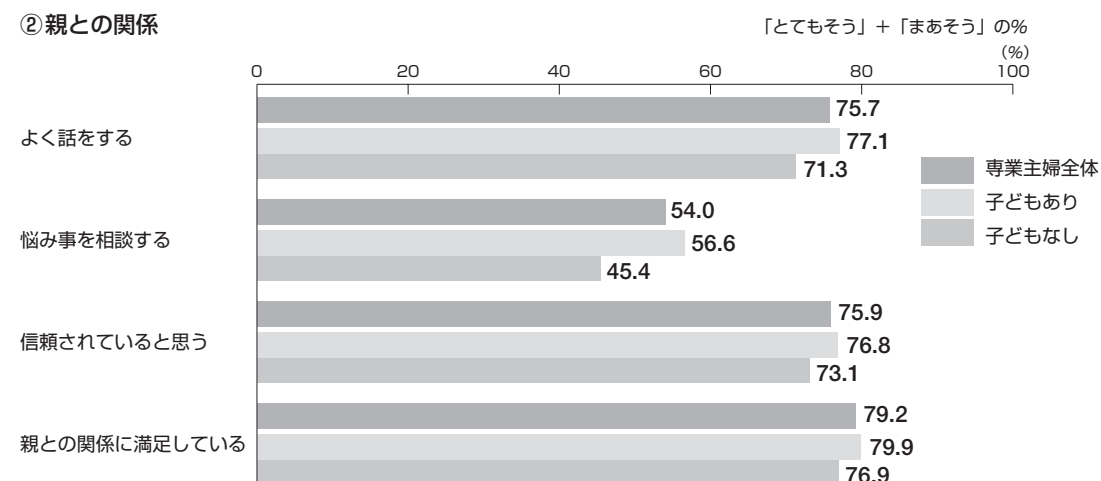
- ・母親とは仲よしでいまだに親離れできていないかもしれない。
- ・結婚までは母親のほうの子離れできず、いろいろと口出しされたが、結婚してから口出しがなくなった。子どもができて意外にあっさりとしている。

図3-2-6 人間関係(子どもの有無別)

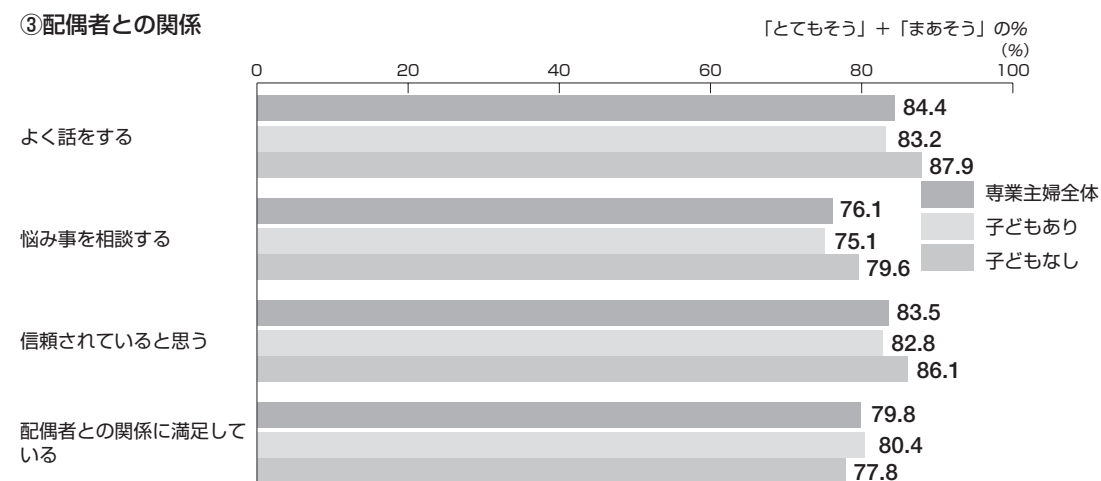
①友だちとの関係



②親との関係



③配偶者との関係



注) 専業主婦のみ分析。

では、実際に家庭を築いている配偶者との関係はどうだろうか。友だちや親よりも絆は強く、「とてもそう」+「まあそう」の割合でみると、「よく話をする」「悩み事を相談する」「信頼されていると思う」「配偶者との関係に満足している」で8割前後を占めている(図3-2-6③)。ただし、「悩み事を相談する」では、「あまりそうでない」と「ぜんぜんそうでない」を合わせて23.9%と他の項目と比較してやや多く、約4人に1人の割合で存在している(巻末基礎集計表参照)。

ところで、子どもの有無別に配偶者との関

係をみたところ、「とてもそう」+「まあそう」では差があまりみられなかったが、「とてもそう」の割合において差がみられた。5ポイント以上の差がみられた項目をあげてみると、「悩み事を相談する」(子どもあり38.0%<子どもなし46.3%、以下同)、「信頼されていると思う」(38.0%<45.4%)、とくに「配偶者との関係に満足している」(36.5%<49.1%)では12.6ポイントの差だった(図表省略)。以下のインタビューの声のように子育てを通して夫婦の絆が深まっていくようにも思えるが、実際はそうではない家庭も多いのかもしれない。

インタビューから

～夫は子育てや家事にとっても協力的。100点をあげたいくらい！～

- ・出産後は、子育てが仕事という感覚になった。仕事に対して完璧を求める性格上、夫に対しても「仕事」のパートナーとして完璧さを求めてしまった。それまではほとんどけんかをしなかったのに出産後はげんかに近い話し合いになったこともあった。子どもが寝静まったあと、近くのファミレスで話し合うこともあった。そうして話し合いを重ねてお互いに理解を深め、今はいい家庭を築いている。
- ・子育てと家事をしている私に夫からのねぎらいと感謝の言葉がある。毎日のお弁当に「おいしかったよ。ありがとう！」と言ってくれる。
- ・夫は子育てや家事にとっても協力的。100点をあげたいくらい。

5. 就職についての意識

専業主婦は、働くことに対してどのような意識をもっているのだろうか。

① 就職についての意識

「現在あなたは就職についてどのように考えていますか」という設問についてみてみよう。「希望と違う仕事であっても働きたい」(5.9%)、「希望の仕事があれば働きたい」(54.0%)を合わせると、「働きたい」と望んでいるのは約6割である。一方、「働いても働かなくてもどちらでもよい」(12.8%)、「働きたくない」(16.5%)であり、「わからない」(4.3%)を含めると働くことに消極的なタイプは約3

割であった(表3-2-2)。

数値は省略するが、子どものいる専業主婦の配偶者の年収別に就職についての考えをみていくと「希望と違う仕事であっても働きたい」と強く思っている割合は、配偶者の年収が300万円未満の層で一番高かった。「働きたくない」という専業主婦の割合は、配偶者の年収が低い層(300万円未満)と高い層(700万円以上)に多い傾向がみられた。

しかし、インタビューからは、配偶者の年収が高い層ではなくても経済的に満たされていると感じているという声が聞かれた。お金をかけない生活の楽しみ方や家計のやりくりの上手さが、生活の満足度を高めているのであろう。

表3-2-2 就職についての意識

	(%)
	専業主婦全体
希望と違う仕事であっても働きたい	5.9
希望の仕事があれば働きたい	54.0
働いても働かなくてもどちらでもよい	12.8
働きたくない	16.5
その他	6.5
わからない	4.3

注) 専業主婦のみ分析。

インタビューから

～今は働きたいとは思わない。しかしこの先のことを考えると…～

- ・現在は働きたいとは思わない。子どもたちが中学・高校生になったら、パートで働いてもいいかなと思っている。
- ・経済的に満たされているので、とくに働く必要性も感じていない。
- ・夫の収入だけで今現在は満足している。しかし、この先、子どもたちに何か習い事をさせたりする費用は、今の収入だけでは足りない。そのための収入を稼がないといけないと思っている。
- ・今はとくに働く必要性を感じていない。経済的にも満たされており、子どもから手が離れるまでは外に出て働くことは考えていない。ただ、在宅でできる仕事はやってみたいという気持ちもある。
- ・子育ても一段落ついたので働きたい。自分としては家にいるよりも外で働いたほうが、生き生きしているタイプだと思う。
- ・今現在はまったく働きたいと思っていない。働くとなると、平日の昼間だけできるパートの仕事を探すと思う。
- ・働きたい気持ちもありつつ、子どもと一緒にいたい気持ちもあり半々である。
- ・経済的に働く必要性に迫られていないが、仕事を通して最先端の技術に触れていたい、世の中へのつながりを得たいという気持ちが強い。

② 働くとしたら重視すること

もし働くとしたら重視することについては、第1位「育児と両立できること」(70.1%)が第2位「自分のやりたい仕事であること」(41.4%)を大きく引き離している。

この結果は、なぜ専業主婦になったのかという理由と重なるのではないだろうか。育児

との両立がかなうのであれば、専業主婦を選択しなかった人も多いのではないかと考えられる。

第3位は「好きな時間に働けること」で34.7%であるが、こちらも子育てを優先した考えから希望するものであろう(p.47 図2-1-2 参照)。

インタビューから

～もし働くとしたら「育児と両立できること」が条件～

- ・もし働くとしたら1番目は「育児と両立できること」、2番目は「自分の個性や能力を生かせること」、3番目は「長期間安定して働けること」。今どうしても働く必要性に迫られているわけではないので、3番目は優先度合いが低くなる。
- ・1番目は「育児と両立できること」、2番目は「職場の雰囲気がよいこと」。やはり人間関係がよくないところでは働きたくないと思っている。今まで嫌な職場にあたった経験はない。

6. 子どもの頃の様子

① 子どもの頃の体験

小学生・中学生だった子ども時代にはどのような体験をしてきたのだろうか。

専業主婦の子ども時代の体験(「よくあった」+「ときどきあった」の割合)を全体と比べると、とくに「読書をする」「家で

勉強をすること」「親や学校の先生以外の大人と話をすること」「地域の行事に参加すること」などで高くなっていた(巻末基礎集計表参照)。

インタビューからは、塾・習い事の先生や小学校の担任の先生などの大人とのかかわりが印象に残っているエピソードとしてあげられていた。

インタビューから

～印象に残っているのは、児童や生徒との交流を大事にしてくれた学校や塾の先生～

- ・印象に残っている大人の存在は、小学校の頃から20歳まで習っていた書道の先生である。友だち感覚でいろいろと話せる先生だった。
- ・中学校時代に通っていた進学塾の先生。勉強だけでなく生徒との交流を大切にしてくれる先生だった。
- ・子どもの頃から目上の人や大人にかわいがられたほうだと思う。学校の先生にも恵まれていて、実家に戻った際には、小学校の時の先生と一緒に飲みに行くこともある。
- ・印象に残っているのは、小学校6年生の時の担任の先生。学校以外でも子どもたちを美術館に連れて行ってくれた。

② 子どもの頃の親の様子

専業主婦が子どもの頃、親はどのような様子だったのだろうか。全体と比べ「とてもそう」+「まあそう」の割合ではあまり差がみられなかったが、「とてもそう」の割合で差が大きかった項目は、「誇りをもって仕事をしていた」「しつけが厳しかった」「家族の仲がよかった」などであった(巻末基礎集計表参照)。

アンケート結果から浮かぶ専業主婦の親のイメージは、誇りをもって仕事に臨み、子ど

ものしつけには厳しいが、家族の仲はよく、温かい雰囲気の家を築いていた様子である。

アンケートの対象となった専業主婦の8割近くが現在、親でもある(p.151 表3-1-2 参照)。日々の子育てを通して、自分が親の影響を受けていると感じる面もあるのではないかと。

前節のインタビュー事例からも、親の後ろ姿を見て育ってきた様子が見えがえた。

インタビューから

～子どもの頃、両親は楽しそうに生活していた。子どもが大きくなってからは夫婦2人で出かけることもあった～

- ・小学生の頃は、夫婦げんかをしているところを目にしたが、大きくなってからは夫婦2人でドライブに出かけることが多くなり、いつの間にか2人で行動することが多くなってきた。
- ・両親の仲はよかった。中学生の頃は2人で飲みに出かけて、お土産を買ってきてくれた。
- ・両親ともにまじめな性格である。ぜいたくもせずに質素に暮らしていた。母親は父親が話を聞かないことに関して時折不満を漏らしていたが、両親の仲はほどほどによかったのではないかと。
- ・家族で食卓を囲むことが多く、そこでの会話は多かった。夫婦で楽しそうに生活していた印象がある。

③ 子どもの頃の親のしつけ

専業主婦が子どもの頃、親は何を重視して子育てをしていたのだろうか。全体と比較して「とても重視していた」+「まあ重視していた」の割合では、とくに「家事を手伝うこと」で高くなっていた。また、「とても重視していた」だけの割合で差のみられた項目は「自分でできることは自分でやること」「家事を手伝うこと」であった（巻末基礎集計表参

照）。

自分のことは自分でやることや家事の手伝いなど、自立に重きを置いた子育てをされていたと思われる。

インタビューからも家事の手伝いをするようにしつけを受けていた様子がうかがわれた。

インタビューから

～あいさつ、手伝い、友だちづきあいを重視したしつけ～

- ・あいさつについては厳しかった。朝「おはよう」と言わないと叱られた。
- ・家事の手伝いもさせられた。小学校の時は皿の片付け、中学校の時は洗濯機を仕掛けてから登校していた。
- ・しつけにはそれほど厳しくはなくわりと自由奔放な家庭に育ったと思うが、あいさつと言葉遣いには気をつけるようにしつけられた。
- ・「勉強しろ！」とは言われなかった。部活動については自分で決めてきちんとやるように言われた。両親のしつけで大事にしていたのは、友だちづきあい（人づきあい）だったと思う。
- ・子どもの頃、きょうだい3人で家事を分担して手伝っていた。

④ 子どもの頃の得意だったこと

彼女たちはどんなことが得意でどんなことが苦手だったのだろうか。

得意だった（「とても得意だった」+「やや得意だった」）ことをみていこう。「楽器を演奏したり歌を歌ったりすること」は全体では51.2%であるが、専業主婦では65.1%と13.9ポイント高い。インタビューの声にもあるよ

うに、子ども時代にピアノや電子オルガンを習っていた人が多かったのだろう。

逆に苦手だった（「とても苦手だった」+「やや苦手だった」）ことは、「難しい問題をじっくり考えること」が全体では43.0%であるのに対し、専業主婦では56.0%と13.0ポイント高かった（巻末基礎集計表参照）。

インタビューから

～子どもの頃からピアノや電子オルガンを習っていた～

- ・幼稚園に上がるまではオルガン、小学校からはピアノを習っていた。
- ・幼稚園の頃から電子オルガンを習っていた。その後就職活動をするまでレッスンを続け、講師の資格も取得した。
- ・中学校では吹奏楽部に入りサックスを担当していた。卒業後はまったくサックスを吹かなくなったが、今でもサックスの音色を聴くと体がうずうずしてくる。
- ・小学校の頃パソコンクラブに入っていた。中学校でもパソコンの授業があり、そこでパソコンに興味をもった。
- ・小学校の頃は、勉強はしなかったが、スポーツは何でもできる子どもだった。中学校では水泳部で活躍した。

第3節

専業主婦の世界 まとめ

これまでのアンケート結果とインタビューの声から専業主婦の生活満足度の高い理由を以下のさまざまな角度からまとめてみよう。

1) 総合的な生活満足度

アンケート結果からは、子どものいる専業主婦のほうが、子どものいない専業主婦より生活満足度が高いことがわかった。

さらに、有職で既婚の子どものいる女性と子どものいる専業主婦を比べると、子どものいる専業主婦のほうが生活満足度は高い。仕事をもつことによってうまれるストレスが有職女性の生活満足度を下げているのではないだろうか。

インタビューからは、育児に専念したい、子どもと一緒に過ごしたい、子どもの成長が楽しみなどの子どもに対する感情が生活満足度を高めている様子がうかがえた。

2) 現在の生活について

アンケート結果では、「これから先の生活が楽しみだ」「時間的なゆとりがある」「健康に自信がある」で5～6割、「理想に近い生活を送っている」が約5割を占めていた。

また、子どものいる専業主婦は「これから先の生活が楽しみだ」「健康に自信がある」の割合が高く、子どもの成長を楽しみにしている様子がうかがえた。

3) ふだんの生活について

アンケート結果より、子どものいる専業主婦は、テレビの視聴時間やインターネットを

する時間は子どものいない専業主婦より少ないが、家族との会話時間（電話を含む）は多く、家族とのコミュニケーションにより多くの時間を費やしていた。子どものいない専業主婦と比べると、趣味やスポーツなどの頻度は少なくなるが、インタビューからは、家族との会話や子どもの世話をすることで満足度が高まっている様子がうかがえた。

4) 人間関係

アンケート結果より、友だち、親、配偶者との人間関係は良好であった。友だちに約7割が、親には約5割が悩み事を相談していた。とくに配偶者との関係は友だちや親を超える存在であり、密接な関係であることがうかがえる。配偶者とよく話をし、悩み事を相談し、信頼し合い、関係に満足しているのは8割前後であった。

インタビューからは、子育てを通して意見がぶつかり合っても納得がいくまで話し合い、絆を深めていく夫婦の様子もみられた。

5) 子どもの頃の親の様子

子どもの頃の親の様子が現在の家庭生活に反映しているようである。

アンケート結果からは、専業主婦では「家族の仲がよかった」と思う割合も比較的高かった。

インタビューからは、子どもの頃の親の幸せそうな様子を振り返って、自分も母親のように専業主婦となり、温かい家庭を築きたいと思っている様子がうかがえた。

解説・提言 4

「子どもの自立」は「親の自立」

—自立に向けた5つの条件とは—

立正大学教授 臨床心理士 宮城まり子

●増え続ける親になれない親たち

子どもの成長にとって最大の影響を与える要因は「家庭」である。子どもが成長の過程で、親と温かくふれあい、親から家庭教育やしつけを受け、豊かで思いやりのあるやさしい人間性を育み、善悪の判断、社会マナーや常識、身辺生活の知識やスキルなどを身につけることができるか否かは、家庭での「親の教育力」にかかっている。人間が子どもの「親になること」は、それは大きな厳しい責任と役割を背負うことだ。しかし、昨今のニュースに取り上げられるように、実の親による幼児の虐待、育児放棄、自他の命を大切にしない子ども、感情のコントロールのできず我慢が苦手な子どもの増加など、家庭における「親の教育力」の低下の問題は深刻化している。すなわち、「親になれない親」の増加の問題である。物理的に出産し親になることはとても簡単でも、精神的に成熟した「大人の親」になることは難しい。子どもをもったその日から、子どもと一緒に親も学びながら、ともに育ちあい、発達し大人の親になる「共育」努力が欠かせない。

●育児のゴールは親子の自立

育児の最終ゴールは自立である。親がいなくても1人で自立し子どもが生きることができるようになることである。そのために幼児期から自立へ向け、食事、着脱、排泄、入浴、

など親に依存せずともできるように生活のなかで子どもをしつけ、教育をしているのである。そして、最終的には社会のなかで働き、収入を得、経済的にも親から自立し、子どもが自分の人生を歩むことができるようにすることが育児の目的であり、育児の社会的役割であるといえよう。

子どもを自立させる過程は、同時にまた親の子どもからの自立の過程でもある。子どもは成長に伴い、時間的にも物理的にも次第に親から離れ、生活するようになる。親子の距離が出てくるにしたがって、精神的にも自然に親子は分離していくのが本来の定理であった。しかし、最近では少子化のなか、親が先まわりして細かく子どもの世話をし、子どもが大きくなって親が互いに依存していつまでも離れられないような状態が散見される。

すなわち、「子どもの自立」を支えるのは「親の自立」であり、育児のゴールはともに「親子の自立」である。そのためには、子どもの成長に伴い距離をとり、子どもを手放し、離れていく子どもの後ろ姿を定位置から見送ることができる（子どもが離れたら、親から近づいていかない）親でなければならないだろう。親は子どもの成長と並行して、育児後の自分の生き方の青写真、育児から卒業した後の自分の世界を新たに構築しながら、「育児からの自立」の準備が欠かせない。